

東名病院だより

Vol. 6

第22号

2006.7月発行

東名病院ホームページアドレス・Eメールアドレス
<http://www.med-junseikai.or.jp/tomei/index.html>
e-mail tomei-hosp@med-junseikai.or.jp

東名病院発行／〒480-1153愛知県愛知郡長久手町作田一丁目1110
TEL (0561)62-7511 (代) FAX (0561)62-2773



サラシナショウマ 伊吹山

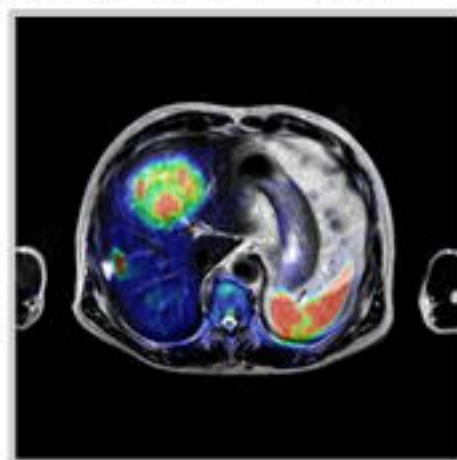
MRI・DWIによるドックのすすめ

従来、頭部特に脳梗塞の急性期診断に非常に有用とされてきた、MRIのDWI（拡散強調画像）が、胸部・腹部にも応用され、病変の早期発見に有用であることがわかってきました。当院でも胸部・腹部にも応用して、症状のほとんどない時期に、肺癌、大腸癌などが発見されています。

MRI・DWIでは、ドックなどに使用されているPET検査（放射線同位元素による検査）に比べて、安価で、体に対する作用がなく、短時間で検査できる利点をもっています。

当院では、MRI・DWIをドックとして、全身に応用することが出来る様になりました。

脳のみでなく、胸・腹部のドックを受けられることをおすすめします。ご相談下さい。



肝臓がん

今回より、神経内科領域の事を機会があるごとに御紹介させていただきますが、第1回目と致しまして神経内科の診療について書かせて頂きます。

神経内科は、基本的には脳から脊髄にかけての中枢 末梢神経 骨格筋の疾患を対象とする診療科であります。例えば、具体的な疾患としましては頭痛症、脳血管障害、パーキンソン病、多発性硬化症、不随意運動症、多発性神経炎、重症筋無力症、多発性筋炎等の疾患に対しての診断と内科治療を行う診療科であります。

当科と脳神経外科との違いは、神経疾患の外科術適応のあるなしで分けられます。

一般によく間違われるのは、非器質性疾患である躁鬱病 統合失調症や神経症などを対象とする精神神経科（あるいは神経科）とストレス性胃十二指腸潰瘍や膵炎などの精神的な原因から起こる器質性疾患を対象にする心療内科とであります。

もちろん、これら診療科は神経内科と一部重なり合う部分もありますが、基本的には各々別の診療科であります。神経内科での外来診療で最も多い症状（訴え）は、頭が痛い ふらついてめまいがする 手足のしびれや脱力がある等であります。これらの症状が、中枢 末梢神経 骨格筋、あるいはこれらが混じり合った形か別の原因かを、問診や神経学的理学所見であらかた判断をします。そして、血液生化学検査、画像検査（頸動脈超音波検査 CT MRI（図1）等）電気生理学検査（脳波 筋電図 神経筋伝導速度等）を追加施行し診断を詰めていき、治療を選択する形で進んでいきます。

問診は、診断に際して、最も重要で有るといわれています。熟練された神経内科医は問診だけで7割以上の診断を絞り込み、神経理学所見で精度を高め前述の補助検査を行うというのですが、最近はMRI検査の向上により皆にわかりやすい検査の方に診断の重心が移っているように思います。特に、脳血管障害（脳梗塞 脳出血等）の急性期の診断治療、脳神経外科での手術の適応や術後経過を確認するにはなくてはならない検査となっております。しかし、神経内科領域には現在の画像検査の所見に変化の見られない疾患が多く存在することも知られており、その場合の問診と理学所見の重要性は増すと考えております。

診察では、脳神経の支配が及んでいる顔面から始まり、症状に応じて上下肢末端の感覚や筋肉の堅さの程度あるいは、歩行及び書字などの日常生活動作の様子を確認し病巣の広がりや質を判断します。診察で使われる器具を、図2、図3に御紹介させていただきます。



図1 MRI撮影風景

図2は打鍵器といわれているもので上下肢の筋肉の腱を打撃し反射を診ます。これは、一般的には脚気の検査という認識がありますが、実際はもっと複雑であり、運動障害や感覚障害が、中枢あるいは末梢神経に起因するものかを判断するのに重要であります。図3は上が痛覚刺激用の針で、下が触覚刺激用の筆、振動覚刺激用の音叉です。



図2 打鍵器各種



図3 針、筆、音叉

温度覚は金属や氷を使うことが多いです。これらを使って、顔面や四肢体幹の感覚障害の範囲や程度を確認し該当する疾患群に当てはめ、画像検査を含めた補助検査を施行し診断治療を致します。なかには診断が付いても、神経内科領域の対象疾患はあまりにも種類が多く、それぞれの分類が細かいために、受診された方（あるいは家族の方）や専門外の医師の方を困惑させることがあり、御理解に時間がかかることがあります。

又、神経内科での範疇外と判断した場合は、しかるべき診療科にご紹介させていただく場合もあります。なかには、数日の投薬のみで終診になる場合や、非常に診断に難儀し何年も外来で経過観察が必要な場合もあります。さらには、県が定めた難病の特定疾患や肢体不自由の身体障害者、介護保険制度の書類を作成し公的支援に関わっていくこともあります。このあたりの流れは、どこの診療科でも大体同じで神経内科だけが特殊という訳ではありませんが、神経系は生理学的機能やその疾患の原因や病態等に未だよく分かってないことが多いので、TVや雑誌でしきりに啓蒙される割には、一般にはなじみが薄く難しい分野だということと言えます。

次回からは、当院で頻度の多い疾患について簡単に御紹介させて頂くつもりです。

神経内科では脳・脊髄・末梢神経・筋肉の病気を診療しています。対象疾患は概ね以下の通りです。

1. 神経変性疾患
パーキンソン病、アルツハイマー病、脊髄小脳変性症
ハンチントン病、筋萎縮性側索硬化症など
2. 免疫性神経疾患
多発性硬化症、ギラン・バレー症候群、重症筋無力症
筋炎など
3. 感染性疾患
脳炎、髄膜炎など
4. 血管障害
脳梗塞、脳出血など
5. その他
筋ジストロフィー、てんかん、ミトコンドリア脳筋症
頭痛など

次のような症状をお持ちの方は、お気軽にご相談下さい。

- ・頭が痛い
- ・手足の動きが悪い、力が入らない、手足がやせた
- ・ふらつきがある、手足が突っ張る、よく転ぶ
- ・手足や口などが意思とは関係なく動く・ふるえる
- ・手足がしびれる、感覚が鈍い
- ・物が二重に見える、まぶたが重い・下がる
- ・物忘れが多い、計算ができない、字が読めない
書けない
- ・呂律が回らない、飲み込むときにむせる
- ・意識がなくなる、けいれんをおこすことがある

血栓予防薬と食品について

管理栄養士 篠崎庸子

生来よりの食習慣の積み重ねによって 何がしかの生活習慣病（糖尿病・高脂血症・高血圧等）を持病としてお持ちの方が たくさんおられる昨今です。

生活習慣病について、健康への直接的な危機感を持たれる方は そう多くはありません。しかし、長期にわたり これらの生活習慣病を放置して（定期的な受診・服薬とあわせ、積極的な食生活習慣の改善を怠って）いると、動脈硬化（血管の老化現象）を促進させ心臓病や脳血管障害等を起こしやすくなる事は 皆様も周知の事実です。

これら動脈硬化を原因とした疾患の指摘を受け、 血液を固まりにくくさせる薬（薬品名：ワーファリン）を処方されている方が 非常に多数おられるのが現状です。

この薬を処方された折には、『抗凝血薬療法手帳』（図1）という、小さな手帳を買います。この中には この薬の服用にあたっての注意事項が 多岐にわたり 記載されており

ます。血栓予防薬（ワーファリン）は、他剤（薬・ハーブを含む）・食品との相互作用に注意が必要な薬であることが知られています。手帳の配布・携帯もそういった理由によるものです。ここでは、その中の拮抗剤である『ビタミンK』について ご案内します。

《ビタミンKのはたらき》

このビタミンには、現在 生体において主に、2つの働きが分かっています。血液凝固に不可欠なビタミンであり、且つ骨吸収を助けるビタミンであるという事です。具体的に言うならば、凝固に関しては、出血した時等、肝臓でプロトロンピン（血液凝固因子）がつくられる際に必要不可欠な成分です。

また、一方で、血管内では、血液が凝固を抑制する物質の合成にも必要不可欠な成分なのです。いわば、凝固と、凝固抑制の両方に関与するビタミンです。

また、骨に関しては、オステオカルシンという骨形成を促進する蛋白質を活性化する事が分かっています。

《ビタミンKの種類》

さて、『ビタミンK』には、大きく2つの種類があります。主に食事で摂取されるフィロキノン（ビタミンK1）と、腸内細菌によって作られるナメキノン（ビタミンK2）です。

ビタミンK1は、植物の葉緑体でつくられます。従って、同じ植物でも 緑色の濃い葉っぱの部分や、日光の当たる表側の方が含有量が多くなります。実野菜や穀類には あまり含まれません。

ビタミンK2は、細菌などの微生物によってつくられます。体内で腸内細菌の作用を受け合成されるものです。肉、魚、乳製品など動物性食品に多いのが特色です。どちらも 働きの強さは同じくらいとされています。

我々がビタミンKの制限をする時に 気を付けなければならないのは、勿論総量となります。



図1 ワーファリン手帳

